

今私は大陽の田舎にあつて観音石像を立て、死なれた故角尾学長初め職員、看護婦、大学学生、医専学生達の冥福を遙かに祈っている。

(三〇・五・一五)

### 物療科学教室

当時教室は内科と耳鼻科の間で木造建であつたので六月頃（昭和二十年）本館の二階と内科教室の地下の一室へ分散的に疎開。

永井助教授は部長として施副手補と共に、教育並びに診療に努めていた。

技術員として施景生、友清史郎、梅津純、小笹ハツエ、小笹トミエ氏が居た。教室勤務の看護婦としては久松シツノ看護長以下十三名であつた。

### 被爆時の状況

永井助教授は本館二階で受爆し、顔面に負傷、施副手補は元氣な者と共に救出作業に当る。

被爆直後、行方不明の看護婦八名の内五名、山下、浜、井上、吉田、大柳嬢の遺体は十日運動場で発見さる。その夜生き残り教室員で御通夜を営む。雇小笹ハツエ氏は当日休暇をとつて居て家野町の自宅で爆死す。

その後教室員は永井助教授の下に医療班をつくり西浦上の三山で被爆者の治療に当り八月二十二日解散する。

## 故永井隆助教略歴

從五位勲四等医学博士 物理的療法科教授

明治四十一年二月三日鳥根県に生る

昭和七年三月長崎医科大学卒業

昭和七年六月同大学助手に任ぜらる

昭和十四年四月同大学助教授に任ぜらる

昭和二十一年一月同大学教授に任ぜらる

昭和二十四年九月退官

昭和二十六年五月一日病のため卒す

## 主なる研究題目

尿石のレ線による微細構造に関する研究

## 死亡者の官職と氏名

官職	氏名
助教	永井 隆
雇	小笹 ハツエ
四年	山下 秀子
〃	浜 トモエ
三年	井上 ミツネ
二年	吉田 キヨ子
〃	大柳 ツヨ
一年	淵野 フヂエ
〃	谷口 チズ子
〃	谷村 セツ

## 原爆体験記

金子 マサ子

悪夢の様なあの日より早や十周年を迎え思いもあらたに云い知れぬ感におそわれる。

物療科は耳鼻咽喉科と内科に挟まれた院内で最も古い意義ある木造の建物であつたが、燃ゆる可能性があるので急に疎閑する事になり、病院本玄関の外來の一部、内科の地下室に分散して間もない頃であつた。

朝礼が済むと、お互いに手を振つて夫々の勤務場所に別れる。私は調外科のレントゲン室へと急ぐ。こゝは二階の手術室の廊下を隔てた側で、売店の前を通る大廊下を見下していた。

この頃は最早医局の先生も技術員も次々に出征され、戦場に赴く男子に変わり女子が奮闘すべき秋が目の前に来ていた。

医員は山本、浜里両先生、技術員は広島、岸川、田中、皮膚科レントゲン室の鶴山、調外科レントゲン室の長沢の諸氏が出征され、永井部長先生、施先生が講義に透視に診断に又防空演習、救護訓練指導にと日夜努力されていた。

けたたましい空襲警報が解除になり、調外科の防空壕より皆外來の方に行かれたので森閑とした手術室を通り、レントゲン室にもどりほつと一息、部厚い防空頭巾をとり救急囊を机におろし、真向いの大廊下に目を向けて腰を降した瞬間、通っている女の人が「あゝ」と異様に叫び手を宙に浮かしたと同時に、閃光一瞬、「ゴォ」と物凄い音響と共に目の

前が真暗になり、天井、フィルム棚、撮影機と共に押し潰されて了つた様に感じた。暫くするとボーと明るくなつた。あゝ生きてゐるらしい。目をそつとあけ恐る／＼手で首から顔を撫でゝみると、血がべつとりにじみ出ている。

隣接の古屋野外科の手術室に一週間程前直撃弾が投下されて間もないので、今度は調外科と思つた。調部長先生始め皆如何してられるのだらう。そしてレントゲン科の人々は――。身動き出来ない、息が苦しい、じつと目をとじた。暫くすると、荒々しくどなつた様な叫び声がある。はつと目をあける。「誰れも居らんかあー」あゝ救いに來て下さつたのだ！一刻も早く自分の存在を知らせようとしたが声が全く出ない。必死に体を動かしても駄目だ。上にぬけようにもいろんな物に挟まれて動けないのである。運を天にまかせて、そのまゝ空しく目をとじて了つた。後でお聞きした事だが、廊下を隔てた看護室で婦長の村山さんが下敷になつていられるとは知らなかつた。

やがて如何程の時を経たのだらう。「ゴ／＼パチ／＼」と燃ゆる音がする。早やあちこちの室内より火の手が廻つたらしい。やがて熱っぽいむせる様な異様な臭と煙がさあ／＼と流れこんでくる。まご／＼出来ぬと焦り始めた。

それから如何してぬけてたのか記憶がないが、気がついてみると廊下に出ていた。しつかりむすんだズツクの靴が吹き飛んでない。モンペは引き裂れ、足には血が滴つている。とにかく戸外に逃れなくてはならぬ。無意識に散乱している手術室の下駄を片方つまかけ、狭い階段を転げる様にして外に出たとたんに、頭を血に染められた木戸先生にばつたり出

逢つた。「あゝ先生御無事で」と云おうとするが言葉にならず、唯茫然とみつめていた。

目をてんずると、物凄いい光景が繰り展げられていたのである。さながら阿修羅の如き叫び！火は／＼と唸つて猛り狂い、かろうじて焔の中より逃れた人、人、人、着物ははぎとられて素裸のまま血だるまになつて、よろめき、つまづき、あえぎつゝ、山へ山へと登つている。髪は焼けちぎれ、皮膚はべろりとはがされ、半焼の黒ん坊が突つ走つている。これは大変な事になつて了つた。とにかく一人でも多く救助せねばならぬ。片方の素足に男の編上靴を拾い、夢中で手をもぎとられた息絶え／＼の学生を、高南病棟の裏山へと引つぱつて行つた。その学生は着いたたんにくたりとなつて、しきりに私の名前を聞いていた。唯一言「院内の者です」と答えた。

それにしても未だ物療科の人々に逢わない。永井先生は？そして教室の人々は如何したのだらう。かろうじて逃れた人々の親を求める声、友を求める声を聞きつゝ、しきりに捜していると、既に山の上で救護に活躍して居られる永井先生のお元氣な姿を発見した。久松婦長さん、橋本、椿山さん等と逢つて、口もきけずすわりこむと、先生が「おゝ金子君よく生きとつたねえ、よかつた／＼」と肩を叩いて下さつた。森内さん、皮膚科物療室の崎田さん、婦人科物療室の小笹富枝さんが見えぬ。私を捜しに行つた後だつた。崎田さんは大腿骨折で皮膚科の防空壕に運ばれ、施先生、友清さんは角尾先生を救出されていた。重傷の梅津さんは風景生さんがかゝえる様にして運んでこられた。併し未だ看護婦の浜、山下、吉田、井上、大柳さんが全然分らぬ。空襲のない間をみてこの頃すでに

広い運動場も各科の畑になつていて、その手入れに行つたらしい。三名の一年の看護婦生徒は見当もつかないのである。

時も大分過ぎた頃、夕立が「ざあー」とそこらにのがれて来た焼けたぶれた人々に容赦なく、降りつけた。水々と叫びつゞけていた人々の喜びも束の間、傷口にしみ、痛み、そして寒い／＼とふるえだした。どうしてやつていゝのだろう。私達がかぶせてやる衣類もすでになくして居る。とつさに葦だけ残つた芋づるをとつてそつとのせた。

とにかく元気なものだけでも、救護隊を編成しなくてはならぬ。永井先生は、つと立上り、誰れかゞ病室より取出した「シート」に流れる血で日の丸を大きく染められ、これを竹竿にく／＼りつけ高く／＼押し立てると、元気なものも、傷ついた者も、息たえ／＼のものも這う様にしてぞく／＼集つて来た。こうして救護活動を始めたのである。

永井先生は急いで歩き出されたとたんに、バタツと卒倒された。耳の辺より血がふきだしている。私達はびつくりして了つてうろ／＼した。施先生が慌しく機械をガチャ／＼動かして応急処置をして居られる内に、早くから医員、学生と共に活躍されておられた調先生がすぐ駆けつけて下さつた。

それから男子は板を拾い集めて仮小屋の救護所を造り、女子は岩水をやつとみつけて、そこらにころがつている南瓜を鉄兜でぐつ／＼煮て、夕餉の仕度にとりかゝつた。煮えた南瓜を調先生方と御一緒に、皆食欲がないのを「今後も頑張ねばならぬのだから」と叱られ乍らポツ／＼竹切れでつゝいた。咽が渇くので、拇指大の甘藷、胡瓜をガリ／＼かじつた。誰れかゞ「こんな事と分つていたら、早くお弁当を食べとくのにな

あ惜しい事をした」としきりに残念がつたり、永井先生が「金子君のひよる長か顔を見た時は嬉しかつたねえ」と仰言るので、意気銷沈していた皆がさみしく笑い、少し元気になつたが、帰らぬ看護婦さんの事を思い又しんみりなつた。

すると物療科と親しかつた薬学専門部の清水先生が大きな体に杖をつき、あえぎつゝ「助けてくれ」「学生が皆死にかけると、助つたのは自分のみだ」と涙を流して来られる。全滅の基礎学教室より脱出なさつたとは全く夢の様で、まじ／＼とみつめていた。

日もとつぶり暮れ、空は赤黒く無気味に輝いている。敵機は今もなお低く飛ぶ。人家は燃え尽きるのも知らぬ様に燃えている。

何処からともなくソ連の参戦を耳にした。この時ほど悲壮な気持におそわれた事はなかつた。いよ／＼本土決戦である。今度私達が敗れた時は誰れが骨を拾つてくれるであろうか。即死された方々が羨しくもあつた。永井先生、梅津さんは仮小屋にそのまま、施先生始め元気な者は清水先生をさゝえる様にして、途中皮膚科の防空壕に崎田さんを励し、薬学専門部の防空壕へと急ぎ移動した。

行つて見るとほとんど吹き飛ばされ、かすかに息ある者も目を宙に向け、目の前でバタ／＼息絶えた。シャベル、ツルハシは土深くうづもれていた。私達はその夜は壕舎で死者も、傷者も肩をよせ合つて過した。ほとんどの人は家を焼かれ、肉身の安否さえ分らぬ。唯黙々として多くは語らず思いを馳せ、じつと目をとじた。

夜明けと共にこちらへ来られた永井先生等と学業半ばにしてたおられた学生の人々を外に運び、土をもち木片に名前を標した。その頃から

子供の安否を気づかい、狂人の様に父兄がさがし求めて来られた。今日  
は如何しても看護婦さんを捜さねばならぬ。数多の死体がころがつてい  
る運動場にちちこち、さがしあぐねていると山下さん等が屍体となつて  
発見され、立ちすくんで了つた。あゝ何故畑に行つたのだろうか。かえ  
らぬ事を悔み乍ら私達は、トタン板にそつとのせてあげ「苦しかつたで  
しようねえ」につぶやき、涙と共に細々と煙をあげ乍ら焼いた。

今日は軍方面からも救護隊が出動し活躍し始めた。食糧もおにぎり  
病院の方に運ばれた。皆のを貰いに病院迄、多くの死体をよけながら道  
なき道を、火の手をくぐり、一時間近くもかゝつてのろ／＼行つた。

こうしているうち数日間私をさがし求めた姉とばつたり逢い、そのま  
ゝ皆に別れを告げ、引きずられる様にして親戚の田舎につれて行かれ、  
幾日か夢うつゝのうちに過ぎた。

夏草茂るグビロが丘に佇み、木々に囲まれた基礎学教室、物珍しかつ  
た薬学専門部の葦草園も、今はたゞ寂として声なく虫のみすだく。

最後に亡き方々の御冥福と、愛する我が長崎医科大学の発展を心より  
お祈りすると共に、再びこの悲惨を繰り返さぬ様永遠の平和を叫びます。

(当時 調外科物理的療法科室勤務)

## 原爆受難記

久松 シンノ

戦局が苛烈になるにしたがい、敵機襲来も日増しに烈しくなつたその  
頃、教室員は次々と召されて、教室は永井部長先生、施先生、男子の技  
術員三名だけとなり、あとはすべて女子が各部署を守つていた。病院唯  
一の古い木造だつた私共の教室は、表玄関の二階と、内科教室の地下一  
階へ移転することになり、約二ヶ月を費して、難工事とされていたレン  
トゲン装置も完了して間もなくのことであつた。

運命の日八月九日!!、この日も平常通り一室に集つて朝礼を終え、勤  
務についた。私達は、絶えまなく報ずる無気味な警報に戦きながら、不  
安と焦躁の息づまる様な数時間の後、やがて解除のサイレンに胸をなで  
おろし大空を見上げた。真夏の太陽はカンカンと照りつけて蒸し暑い。  
私は鉄兜、頭巾、重ね着の袷衣のモンペ等を脱いで書類の整理にかゝつ  
た。突然すさまじい閃光、瞬間、床に叩きつけられた。しきりに目を見  
張るが何も見えない。目をやられたなと思つた。椿山さんが、繰りかえ  
し私の名を呼んでいるのがかすかに聞える。返事がしたい。だが咽喉が  
つまつて声が出ない。直撃弾にやられたのかしら、あゝ、これが最後の  
のか。床に腹這いになつたまゝ心臓に手を当てる。脈を触れてみる。皮  
膚をつねつてみる。生きてはいるらしい。やつぱり目がつぶれたのだ!  
生か死か判然としない不気味な状態の中にあつて、「溺者は藁をも掴む」  
おもいで、手を合せていた。やがて二、三分も経つたらうか。あたりが

少しづつ明るくなつてきた。すると不思議な落着きを取戻した。傍には誰もいない。折り重なつて倒れかゝつた天井や棚や扉の中から、やつと抜けだした。立上つた瞬間水道が勢よく流出しているのが目についた。救われた思いで、蛇口にかじりついて、含嗽し、ジャブジャブ顔を洗つて、廊下へ飛び出した。横倒しにたゞきつけられた棚の中から、衛生材料、医療器具、カルテ等々、あたり一面に散乱して足の踏場もない。恐ろしい爆弾もあるものだ。履いていたズックも抜けて見あたらない。たかぶる胸をおし静めながら、ゆがんだ鉄兜を拾つて頭にのせ、下駄と藁草履を、片々に履いて、身ごしらえをした。震える手で衛生材料をかき集め、何度も、何度も取り落しながら、力の脱けた腰にくゞりつけた。

そこへ、「部長先生が生き埋めです、助けて、早く早く」と橋本さんが息せきぎつて走つて来た。変り果てた惨状に目を覆いながら二人はもつれるようにして、本館へとかけだした。何としたことである。内科の建物と、本館とを結ぶ木造の廊下は、跡かたもなく吹き飛んでしまつていつて行つた。既に先生は鮮血に顔を染めながら、患者救出の指示をして居られた。私はみるみるうちに、裸の負傷者数人に取りすがられて、動きがとれなくなつた。男も女も、着物は乱雑に裂けて尾を引いて床にたれ下り、顔も、身体も真黒に汚れその上を、真赤な血液が筋を引いて流れる。婦人の髪は一本立に逆立つて、その形相といつたら人間とは思えない程である。「助けて、助けて。」しがみつくと傷者をどうすることも出来ない。しかし火が廻らないうちに安全な場所へ運び出さなければならぬのだ。一ヶの担架を頼りに、椿山さんと二人で、無我夢中で表玄関

迄、十数回通つた。まもなく、旧レントゲン教室の疎開跡の木材に火がついた。三、四人で、バケツに水を汲んで四、五回通い、消火につとめたが、どうすることも出来ず、とうとう中止してしまつた。

今思えば、全く苦笑せざるを得ない。

市内は逸早く、一面火の海と化した。異様な音をたて、稲佐山から炎々と燃え広がるさまは、もの凄く、身のすくむ程だつた。これから何処へ逃げようか。不安でたまらない。救出作業を終えた玄關前は傷者の山である。永井先生を先頭に、学生の堤、達木、長井さんも加わつて次々と教室員の元氣な顔が現われる。「よかつた。よかつた。」皆しみじみ喜び合つた。而し五人の看護婦、三人の看護婦生徒は一向に姿を見せない。梅津さんは重傷を負い、施さん等が助けて山へ避難した。永井先生は顔面に深い傷を負われ、ほとぼり出る鮮血に顔から軍服迄べつとりと気味悪く染つておられた。片手で顔の傷を抑えながら、「戦場だ、戦地よりひどいぞ、皆元氣だせ、まごまごしていると焼け死ぬぞ。」と大声で叫ばれる。いよいよ偽装していた病院の建物にも火が廻つた。真新しいトランス、フィルム、管球、機械、等さまざまに燃え広がる。私達教室員はむせび泣きながらも、先生の指示通り負傷者を助けながら、病院裏の芋島へと向つた。素つ裸の傷者が道一面にのたうち廻っている。「寒い、寒い」と、いつてガツガツ震える者。水を求める者。無傷なのに氣を失つて息絶える者。出血多量で忽ち冷く変り果てる者。放心状態で我が子の名を呼びながらうろつく者。即死した母親の胸にすがつて、おっぱいを探す生残りの無心な赤ん坊。舌をだらりと長く垂れてうづくまつて死んでいる者。腸が外へ飛び出ている者。あまりのむごたらしさ

に語る言葉を知らない。この溢れる傷者の中にあつて、男子も女子も着ている服を裂いて傷口に当て、ゲートル、風呂敷、タオル等、すべてを繻帯に用いたが、忽ち使い果してしまふ。寒がる傷者に着せかける一物もない。みれば蓋だけになつた芋ヅルをグルグル巻きつけている。

折から雨がばらついた。どうなる事かと、空を仰げば、太陽は真赤になつて、今にも地上に落ちるかの不気味な感に襲われ、思わず身震ひした。診察の最中に負傷された学長先生は、教室の友清さんに背負われてこの芋畠へ避難され気の毒な恰好で横たわつておられる。傍に前田婦長さんが、声をかけても無表情のまま、附添つて居られる。そこにかけてけた永井先生は、いきなり大声で叫ばれた。「学長先生は此処だ。大学本部は此処だ―、皆集れ。」「学生も職員も皆集れ―。」そして内科の大倉先生が病室の火焰の中から漸く拾つて来られたシーツに、傷者の血で日の丸を染め、学生の長井さんが不気味な空に高く振りかざした。一方指揮に當つて居られた永井先生は、出血多量で遂に畠の中で卒倒された。出血はなかなか止らない。幸い山で治療しておられた調教授に止血して頂いた。暫くして、幾分気を取りもどした先生は、よろめきながら立上つて、「さあ皆元氣だせ、男子は負傷者を收容する小屋を造れ、女子は炊事係」と震える声で叫ばれる。皆夢中で立働いた。畠の隅に石を立て、竈を造り、かぶつていた鉄砲を集めてお鍋にし、そこらに転がつてゐる南瓜、冬瓜を拾つて、死体が横たわつてゐる溝の水を丹念にすくつて、それで煮た。煮える間もどかしく、皆それぞれの手に盛つてほおばつた。畠のきょうりをポリポリかじつた。朝たべたきりだ。あゝあの味は……。

生の南瓜をくりぬいて作つたおわんに南瓜の水煮を盛つて、学長先生にもおあげした。

浦上刑務所から危うく逃げ出したと語る、青い服のままの二、三の囚人が、うれしそうに笑を浮べて、私共の夕飯の座に加わつていたのも一入印象的だつた。

腹ごしらえが出来たので、男子の手で築かれた仮小屋に患者を收容しようとして、皆が立上つた瞬間、「助けて呉れ―」と悲壮な叫び声が聞えてくる。薬專の清木先生が、大きな棒にすがりながら、気の毒な恰好で、喘ぎ、近づいて来られ、いきなり永井先生に助けを求めておられる。学生と共に防空壕を掘つて居られたところをやられたとこのことで、学生は全滅に近いらしい。私達は防空壕へ引返される清木先生の後へ続いた。「今度は山へ爆弾が落ちるぞ。」皆口々に云い、又思い込んでいたので、動き廻るのが何となく怖い。真暗い中を、爆音の度に胆をつぶしては腹這いになつた。途中死体につまづいては倒れ、或は死にもの狂いで助けを求め、傷者に足をさらわれたり、求められるまゝに、手さぐりで負傷者を看たりしながらやつと壕へ辿り着いた。掘りかけの横穴壕の入口は想像も及ばぬ惨状を呈していた。全身火傷と云うよりも、黒焦げの学生さん達が、数体の死体の傍で、あらん限りの力を振り搾つて、ころげ廻つてゐるのです。全く手の施しようありません。そして息も絶え絶えに、友の名を呼び交しておりました。「オーイ、岡本君―、大丈夫か―。」「オーイ、頑張れよ―。」「オーイ。」遂には一人絶え、二人絶え、忽ち不気味な沈黙と化したあのむごたらしい光景は……。今も生々しく脳裡に刻みこまれております。変り果てた死体に、曲つたスコップで次々に土

をかぶせ、互に呼び合つていた名前を頼りに木片で墓標を立てる作業を日没迄繰り返した。その夜は、まんじりともせず負傷者と共に壕の中で明した。

翌十日。今日は、どんなことがあつても行方不明の看護婦を探し出さなければならぬ。皆夜のあけるのを待ち兼ねるようにして、壕を飛び出した。敵機が落したのであろうか、一枚のピラが落ちていたので拾つて見たが、この時初めて恐ろしい原爆であることを知った。不吉な予感に襲われながらも、「どうか生きて居てくれるように」と祈り続けていたが、その甲斐もなく、山下、浜、井上、大柳、吉田の五名は、運動場で即死していた。素つ裸で、顔も身体も、ばんばんに膨脹し、泥にまみれた皮膚は紫色にウツ血して、皆目見わけがつかない。幸い、首のまわりに残つた僅かばかりの上着の柄で見分けることができた。

敵機の爆音はあとを絶たない。今度一発落ちれば全滅である。こゝ迄生きのびたからにはどんな事があつても、遺骨だけは遺族へお届けしなければ申し訳けない。途方にくれながらも励まし合つて皆立上つた。そして、五体別々にして、散らばる木切れ、薬を集めて積み重ね、震える手で私は死体に火をつけた。何としたことか。危うく失心しそうになる自分にむかつて、「戦いだ、戦争だ」と何度も何度も言い聞かせたが、溢れ出る涙をどうすることも出来ない。お骨を拾つて氏名をつけ非常袋に納めて肩にかけた。「どんなことがあつても決して手離してはならない」と強く誓つた。その夜は生き残りの教室員が壕の中に集つて、お骨を肩に掛けたまゝ、お通夜をした。そして悲しい一夜が明け不気味な朝が来た。やがて待ちに待つた遺族の方々が、我が子の安否を気づかつて尋ね

て来られた。運命とはいえ、自分だけ生き残つて、亡き友の遺骨を遺族へ渡すことは、全く耐えられない気持だつた。しかし兎に角念願が叶い遺骨を渡すことが出来て肩の荷を下した。

今まで世話をして来た負傷者は本館の救護所へ送り、永井先生を隊長とする教室員十名（内学生三名）の医療班は、西浦上、三山で治療を始めることになった。見渡す限り焼野原と化したその中に、被害をまぬがれた家族が涙ながらに死体を焼いている。うだるような暑気の中にその異常な臭気、足の踏み場もなく転がつている死体。やゝもすれば倒れそうなる我が身にむち打ちつゝ、名ばかりの医療品を入れた買物籠をさげ出発した。

途中上野町の永井先生宅へ立ち寄つた。皆で案じていた夫人は台所の傍で焼け死んでおられた。と申すより生きながら火葬されていた。真黒く焼けたどれた土の上に、ひざまづいた恰好で、骨だけが黄色く転がつていた。「やつぱり僕の直感通りだつた」と低くつぶやいた先生は、一人で黒焦げのバケツにお骨を一つづゝ丁寧に拾つて入れられた。どんなにか夫人の安否を氣遣つて居られた事でしょう。今日迄、只管、負傷者の救護に当られた先生。私達が夫人の安否を氣遣つて口に出しても、「あれはきつと死んでますよ。生きていれば、どんな困難を冒してもきつと僕を探しにくる筈です」と答えられるだけであつた。無気味な爆音は絶え間なく続いている。山の中に隠れ、岩陰に身を伏せつゝ、目的地に向つて進む。安全な地を求めて逃げのび途中力尽きて息絶えている者、苦しみもがいている者、惨状後を絶たず、治療しながら漸く三山へ辿り着いた。爆心地を遠く離れた小川の水はさすがにすみきつている。埃だら

けの身体、血に染つたぼろぼろの衣服を洗い、初めて生きている事の喜びを味う。久し振りに畳の上で自由に手足を伸ばして皆死人のように眠つた。すっかり元氣を取戻した一行は（といつてもとても身体がだるい）着のみ着のまゝの姿で、永井先生の子供さんの宿を本部に日夜をわかつたず巡回治療を始めた。安全地を求めて避難してくる負傷者は次第に増加してゆく。而し、薬も衛生材料も思うにまかせず、応急処置しか出来ない。悪臭漂う深い傷。全身にガラスの破片がつきさつている者。全身の火傷が化膿した痛ましい姿。火傷した患者が苦しみのあまり、田の中に飛び込み、体中に泥を塗りつけて、その苦しみから一時的にでも逃れようとするさまは、痛ましくも悲しい姿である。無傷だった被爆者が、日が経つにつれて、出血、脱毛、倦怠、下痢等の症状が現れ、水さえも飲むことが出来ず、「なぜ私達だけがこんなに苦しまなければならぬのだらうか」と、苦しみもだえて死んでゆく。その死を見守りながら、原爆が如何に残酷なものであるかを知らされ、自分の身にも不吉な予感を禁じ得ない。

八月十五日。僅かの医療品はすぐになくなつてしまつたので補給の為浦上へ……。

病院も今は無慚に廢墟と化している。そこで思いがけなくも、古屋野学長先生から敗戦の詔勅の下つたことをお聞きした。集つた者は職員学生合せて僅か十数人、皆手を取り合つて泣きじやくつた。敗戦、而しそれを素直に聞く事がどうして出来ようか。張り切つていた氣持が一瞬にして力尽きてしまつた。それで体に鞭うちながら再び患者の待つ三山へ歸つた。私達はその夜まんじりともせず夜の明けるのを待つて又患

者の治療に當る。その間にも患者は次々に死んでゆく。かくして続けられた三山の医療班は、八月二十二日、一先ず解散することとなり、共に苦しんだ患者に氣を取られつゝ、郷里に歸つたのは、八月末だつた。

人類最初の原爆の洗礼を受けて、死の衝といわれてから早くも十年、原爆中心地は緑の公園に変わり、原爆の丘には平和記念像が完成した。あの言語に絶した慘禍の原子野は、明るくたくましく復興して当時の慘状は見出すべくもないが、私の脳裡には今尙地獄の絵図のように生々しく刻みこまれている。

原爆落下十周年を機縁に、真に世界平和の訪れを願う三十万市民と共に、原爆の洗礼を受けあの残酷な事実の体験者の一人として、世界平和の為、大きな使命を担つている事を痛感する。

そして、世界の何処に於ても、再びあの恐ろしい残酷極まる原爆、水爆が、決して使用されることのないよう立上らなければならぬと思う。

苦しみながら死んでいった友のためにも

(当時 物理的療法科勤務)